

# 不本意入学から不登校に至った男子高校生との面接過程

安 達 圭一郎

An Interview Process with a High School Male Student Refusing to Attend School after Unwilling Admission

Keiichiro ADACHI

不本意入学を機に不登校に至った男子高校生との4年間にわたる面接過程を報告した。2年間の休学後退学し、その後、大学生となるべく大きな一歩踏み出すのにさらに2年間を要した。その間、青春期発達危機としての問題行動を併発し、発達課題をクリアする中で問題行動の消失と社会復帰をみた。不本意入学への取り組みの重要性について指摘し、青春期にあるクライアントとの関わりのあり方について精神的に考察した。

キーワード：不本意入学、青春期、不登校

## I はじめに

青春期発達の様相を力動的観点から概観した場合、次のような特徴が認められる (Blos, P., 1962; 橋本, 1985; 皆川, 1980)。まず、第二性徴の発現に伴う性的欲動の昂進によって親からの分離・自立が促進され、それに対する防衛としての幼児的対象関係へのしがみつきが出現する。そして、こうした依存と自立の葛藤から、彼／彼女らの自我は一時的に不安定な状況に陥り、そのことが結果的に、友人や異性、理想対象への傾倒、自己愛的万能感の高まり、ひきこもり、肛門期退行による強迫行動の出現などの青春期固有の特徴を浮き彫りにすることになる。

筆者は、不本意入学を契機に不登校となり、その後4年間にもわたってひきこもりに至った青春期男子 (来談当時高校1年; A) との面接を経験した。Aは、ひきこもりの最中、上述した青春期固有の特徴をクローズアップした形で露呈し、こうした発達課題をNew object (小此木, 1976; 乾, 1985) との交流によって克服した。

本稿では、Aとの4年間にわたる面接過程を振り返り、不本意入学者に対する教育的配慮の必要性、及び青春期ひきこもりの病理を発達のつまずきとして捉えることの意義とその克服過程について検討したい。

## Ⅱ 臨床素材

### 1. 面接に至るまでの概要

X年9月、当時高校1年生のAは筆者が関わっていた相談室に母と来室した。精神科医の診察の後、不登校とのことで筆者に依頼があった。

Aは公立の進学高校に入学したものの、選抜形式の統一入試という特殊な事情が災いし、自分の希望とは異なる遠方の高校に決まってしまった。仲の良い友人は全員近くの希望校に決まり、自分一人が現高校になった。1学期は、電車通学ながらなんとか行けたが、2学期からは欠席。母によると「高校に行っても仕方ない。あの程度の勉強なら、家でもできる」と言うらしい。父母ともに、本人の復学を願い登校を促すが、理屈を言い、登校しない。医師や筆者にもきっぱり「いくらここに通ってきても、学校には絶対に行きませんよ」と言う。以降、1回50分、隔週に1回のペースでカウンセリングを始めることとした。概ね母と、時に父と来室した。

Aは、父・母・弟2人の5人家族の長男である。小学校の頃から、神童と呼ばれるほど頭の良い生徒であった。学校でも、クラス委員長を務め、担任からの信頼は厚かった。小4の時に転勤に伴い郊外の小規模校に転校。考え方や行動が早熟で、ういてしまいいじめにあった。いじめられていることは、担任にも両親にも誰にも話さず、明るく振る舞っていた。3ヶ月かけて克服した(ボス格の生徒と親しくなる)。以降学校適応良好で、なんら問題なかった。ところが、小6時、再度父の転勤に伴い、都市部の大規模校へ転校となった。前の小学校が楽しかった分、なかなか馴染めなかったらしい。しかし、明るく振る舞い、しっかりしていることから信任を得、多くの友人ができた。そして地元の中学校に入学した。

成績はトップクラス。このころから、同級生が幼く見えはじめ違和感を持つが、周りに合わせてひょうきんに振る舞い友人が多かった。ただし、女子生徒と関わるのがとても苦手でほとんどコミュニケーションをとっていなかった。内心興味があったが、周りの生徒からは硬派とされていた。男子生徒とは、表面的にはうまくつきあっていたが、なんでも話し合える親友はいなかった。

### 2. 面接経過の概要

筆者との面接では、学校に行かないことを正当化するように、学校・教師に対する批判(「たいした授業はしていない」「あんな教え方だと、誰も納得できない」「勉強ができない生徒は、それだけでダメ人間のようなレッテルをはる先生ばかり」等)を繰り返した。また日課は、午前中1～2時間勉強し、あとは、ファミコン、筋力トレーニング、弟たちとのレスリングと報告された。特に筋力トレーニングやレスリングについて、「僕は、背は低いけど、筋力で人に負けたことはない」と自慢した。また、ある時筆者に腕相撲を申し込み、筆者が負けるとことのほか喜んだ。一方「学校に行かないことへの不安はない」と弱みを見せまいとする態度が認められた。

母親によると、その頃のAの日常について、外出は本の購入と来室時のみ。母が外出するときは、決まって「どこに行くの?」「いつ頃帰るの?」としつこく聞いていた。また本人が大切にしている電化製品をさわる前は必ず手を洗う、ベッドに入る前は2時間近く入浴する等の強迫症状も出現していた。

しかし、Aとの面接ではありきたりな通り一遍の日常報告と学校批判が繰り返された。

このようにして半年間が経過した。相変わらずおきまりの日課を送っていた。新年度、学校側

からどうするかとの打診があり、取りあえず3ヶ月休学となった。両親から、「学校に行かず家にいるぐらいならアルバイトでもどうか」とも促されたが、「勉強をしないといけない」と外出しようとしなかった。

面接場面では、まったく抑揚のない日常報告と筋力自慢が続いていたが、この頃より筆者を批判するような言葉が多くなった（「先生は何大学出身ですか？医者じゃないんですね。たいしたことないですね」等）。さらに、「僕は最低でも国立の～大学には通る自信がある」「あの人は～大学出身。それじゃあ出世はできないでしょう」など、万能感にみちた発言が多くみられた。筆者は、Aのこうした発言に時にプライドを傷つけられイライラしてみたり、進展のない面接に無力感を感じるなどの逆転移感情をもった。しかし直接言葉として取り上げることはせず、Aの言動の背後にある劣等感や無気力感、そこから脱出できない焦りや不安として、筆者のA理解に役立てた。

本来なら3年生になる新年度（X+2年3月）、ついに退学となった。それに先立ち、母親と連れだって学年主任及び校長らとの面談に出かけた。学校に近づくと顔面蒼白となりガタガタ震え、学生服のボタンを引きちぎったらしい。また、玄関で偶然同級生と出会ったが、帰宅後、「あいつが俺を馬鹿にしたような目を見た」と訴えた。日常は平然として淡々と生活していたが、そのギャップに母親は驚いたとのことであった。

面接場面での筆者からの「退学後は？」との問いに「大検を受ける」との淡々とした返答であった。しかし、いつもと異なって殊勝な表情のAは「実は、僕は今まで全く勉強していなかった。しているふりをしていただけ・・・」と告白した。筆者は、Aの面接場面や日頃の生活態度とは裏腹な緊張感にみちた心情を憂いた。そして本心を語ってくれたことにねぎらいの言葉をかけた。それ以外の特に励ましめいた発言はつとめて控えた。

以降の2年間、勉強するわけでもなく、かといってバイトをするわけでもなく、両親にとっても筆者にとっても不安な日々が続いた。「今頃、友達の中にはもう大学合格している人がいるよね」など動き出せない自分に焦りの心情を吐露する場面も多くなっていった。それに呼応するような筆者からの強い促しに対しては激しく逆襲されるなど、Aの内的緊張感はピークに近いように思われた。しかし、これまで来談時には必ず父母のいずれかに自家用車で送ってもらっていたが、遠方を一人自転車で通うようになるなどそのエネルギーを建設的な方向に持っていくことができた。

X+4年1月、Aには可能な限り受容的に接してきた思慮深い父親から「今年、何もできないようなら大学進学はあきらめなさい！そして家を出なさい」との最後通牒がつけられた。父親からの強い後押しによって、Aはほとんど勉強をしてない中で意を決し、大検受験に臨んだ。予想を超えて、大半の教科をクリアしたことに對して素直に喜ぶと同時に「自信になった」と語った。その際、同じように高校を中退し、フリーターをしながら大検を目指す3歳年上の男性Bと知り合いになった。

面接場面ではBとの親交がリアルに伝えられ、Aは確実に社会とのつながりを取り戻していった。AはBに悩みを訴え、Bからの体験に基づく返答はスポンジに水が吸収されるようにAの心に自然にしみわたっていった。AにとってBの存在が大きくなるに伴い、日常生活では新聞配達を始めるなど、確実に行動範囲が広がった。翌年、大検全科目合格。進路に対しても現実的になり、大学進学を念頭においた住み込みのバイト生として東京へと巣立っていった。

### Ⅲ 考 察

#### 1. 不本意入学を巡って

平成19年度文部科学白書によると、平成18年度の高校生の中途退学者の割合は全体の約2.2%（約77,000人）で、その理由は「学校生活・学業不適応」が38.9%、「進路変更」が33.4%と報告されている（文部科学省、2008）。中途退学の直接的理由として不本意入学をとりあげたデータは見あたらないが、学校生活・学業不適応（とりわけ生活不適応）や進路変更が中途退学の理由の7割を占めるなど、中途退学の背景要因として不本意入学が想定されるケースは決して少なくないものと思われる。

Aも不本意入学を契機に不登校となり、中途退学に至った一人である。筆者はこれまでの臨床経験から、特に進学高校の場合学校欠席は学業上の大きなハンディキャップに直結し、そのことが学業不適応の温床となるとの印象を持ってきた。しかも1週間も欠席すれば日々の授業について行くことが困難となり、ケースによってはそのことが取り返しのつかない不安と焦りの原因ともなるのである。いわゆる進学高校の長期欠席者であるAも同様の経過をたどったと理解しても良い。特に面接の後半に筆者に打ち明けてくれたように、不安と焦りから学業にはまったく手を着けられなくなり、その回復には青春期の発達課題の通過と相まってかなりの時間が必要となった。

こうした中途退学者に対して、文部科学白書は「各高等学校において、生徒の能力・適性・興味・関心などに応じて魅力ある教育活動を展開するとともに、一層きめ細かな教育相談、ガイダンスを実施することなどが重要であり、また、就職や他の学校への転・編入学など積極的な進路変更について支援していくことも大切」としている。Aの経過から筆者なりにさらに付け加えるならば、不本意入学であることが事前に分かっている場合は、学校欠席へのハイリスク群として入学後早期の段階からの教育相談活動が望まれるのである。

#### 2. 青春発達危機としての不登校及びひきこもり

経過でも述べたように、Aは不登校によって家族外の人物との接触がまったく断たれてしまい、親からの分離・自立という発達課題を達成するには非常に困難な境遇となってしまった。Blos, P. (1962)、皆川 (1980) の指摘する幼児的対象関係へのしがみつき、強迫行動、万能感的な自己像への退行、ひきこもりという一連の問題行動へと至ったのである。

Aの場合、まず幼児的対象関係へのしがみつきは母親の行動に対する執拗な確認行為として、強迫行動は電化製品に対する潔癖行為や長時間の入浴行動として、さらに万能感的自己像は高校で勉強をしなくても有名大学に必ず合格するとの不動の自信や筋力トレーニングによる強者空想などとして露呈した。しかしながら、こうした行動や空想は強固な性格防衛として機能しているというよりも、非常に脆弱で壊れやすい不安定な防衛であると考えられる。それを証拠に、退学を控えた校長面接の際、一人の同級生の視線に過剰に反応し車内で取り乱すなど未熟で矮小化された自己を露呈したのである。

加えて、こうした防衛の不安定さはさらなるひきこもり行動の強化因子でもある。上述した防衛活動では守りきれない脆弱な自己を「ひきこもる」という行動で安定させるのである。ここにひきこもり行動と青春発達危機との密接なつながりが存在するのであろう。

さて、こうした膠着状態が長引きA、家族、筆者にとって不安な日々が続くが、終始Aの味方

であった父親からついに分離宣言ともとれる最後通告がAに突きつけられた。Aの状態を思うと唐突かつ強烈な申し渡しともとれたが、これが結果的にAの分離・自立への動きに拍車をかけた点は興味深い。この段階では筆者との面接も同様に膠着状態にあり、動き出せないAとの根比べが続いていたように思う。

Aは自立への第一歩として大検受験に挑み、Bとの交流が始まった。乾（1980）は、New Objectを父母代理としての側面よりも発達促進的な新しい対象で、年長の良い先輩（お兄さん・お姉さん）的存在としている。また、一般的な面接場面では、治療者がこの役割を担う可能性が高いと述べている。さらに小此木（1976）は、New Objectを、父母離れを促進し、父母とは異なった親密さ、依存、同一化を共にしうる対象としている。

Aの場合、治療者である筆者ではなく、Aと非常に共通点の多いBに親密感をもち、彼とのつながりを通じて急速に社会との関わりを取り戻していった。Bの存在はAが父母との分離・自立していくことを促進するまさにNew Object的存在であったことに異論はなからう。一方Aにとっての筆者は、AとBとの交流を見守る存在であった。

#### IV おわりに

不本意入学を契機に不登校となり、その後長い年月をかけて青春発達における危機を乗り越え社会復帰していった一事例を報告した。

不本意入学は高校適応を困難にし、一時的な学校欠席を引き起こしやすい。そして、学校欠席が学業への遅れにつながり、特に進学校の場合それが自己価値の低下や自己愛の傷つきを招き、長期にわたる欠席と結びつきやすくなることが示唆された。また、青春という発達段階を考慮すると、不登校そのものが親からの分離・自立を困難にし、ひきこもりをはじめとしたさまざまな発達病理の温床となることも臨床家として十分理解しておかなくてはならない。

大学における不本意入学に関する実態調査やそうした学生への取り組みは各所でおこなわれつつある（例えば、八木・水原、2006；山田、2006）。しかしながら、高等学校に関する先行研究はほとんど見あたらない。現在では、都市部を中心に学校受験がより低年齢化し、不本意入学の問題は一層の広がりを見せることが懸念される。今後は、高等学校を中心とした教育現場における不本意入学問題に注目し、その実態や対処スキルなどに関するさらなる知見を積み重ねる必要がある。

#### 参考文献

- Blos, P. (1962): On adolescence. Free-Press, New York.
- 橋本雅雄（1985）：青春期中期の精神療法. 小此木啓吾ほか編（1985）：『精神分析セミナーV－発達とライフサイクル』岩崎学術出版社
- 乾吉佑（1980）：青年期治療における“New Object”論と転移の分析. 小此木啓吾編（1980）：『青年の精神病理2』弘文堂
- 皆川邦直（1980）：青春・青年期の精神分析的発達. 小此木啓吾編（1980）：『青年の精神病理2』弘文堂
- 小此木啓吾（1976）：青年期精神療法の基本問題. 笠原嘉ほか編（1976）：『青年の精神病理1』弘文堂

八木美保子・水原克敏（2006）：自己形成を基盤とするキャリア教育カリキュラムー東北大学「自分ゼミ」の授業を通して 教育学研究73(4), 122-134

山田ゆかり（2006）：大学新入生における適応感の研究 名古屋文理大学紀要6, 29-36

## 資 料

平成19年度文部科学白書 [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/hakusho/html/hpab200701/index.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpab200701/index.htm)